
センチメンタルマーメイド

戸雨のる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

センチメンタルマーメイド

【Nコード】

N2397G

【作者名】

戸雨のる

【あらすじ】

だから、僕は、魚になった……。

泳いでいる。(前書き)

2008・02・28公開 / 2009・02・24移転

泳いでいる。

泳いでいる。

雨の中を。雑踏を。人波を、泳いでいる。

時折聞こえてくるクラクションのノイズに、僕の心は掻き乱される。人込みは、心地良い。泳いで泳いで、その先になにが待っているのかなんて考えることもなく泳いで。

泳ぎ疲れて、ただ、眠りたい。

見上げると、灰色の雲が泣いていた。しとたと降り注ぐ涙が、街に鮮やかな花を咲かせている。色とりどりの花の中、それでも僕は進む。泳ぐ。

鮮やかに着飾った魚たちが、僕の行く手を阻んでも、僕は止まらない。立ち止まったら溺れてしまう。僕の思考の波に巻き込まれてしまう。

だから、僕は泳ぐ。

スクランブル交差点を泳ぎ、駅前広場へと進んだ。薄闇に包まれた駅前を回り、今泳いでいた道へと戻っていく。

目的はただひとつ。

何も考えずに済むように疲れ果てること。

僕は思考したくない。何も考えたくない。何も知りたくない。

逃げ出して泳ぎ続けても何の意味もないことは知っている。知っているけれども、知りたくない。

雲が本格的に嘆き始め、街中は色鮮やかな花で埋め尽くされようとしている。色鮮やかな傘の花。僕には、必要ない。

髪から滴った涙を拭うことなく、僕は泳ぎ続ける。頬を伝う液体を拭うことなく、僕は進み続ける。

姉が結婚した。

現実には、知らない。僕は今、魚になっている。

*

泳ぎ続けていると、目の前に、赤い魚が現れた。傘を持たない赤色の魚。彼女は僕の顔を見ると、手に持った袋から乾いたタオルを取り出した。

「はい。使って」

魚は水の中でないと呼吸が出来ない。乾かしてしまったら、僕は死んでしまう。

僕は軽く首を振り、赤い魚の誘惑を断った。

「びしょぬれよ？」

なおもしつこく、赤色の魚はタオルを差し出してくる。彼女自体がずぶ濡れになっていることに、気付いていないのだろうか。

「濡れてるよ？」

赤い魚にそう告げる。

「知ってるわ」

彼女はしれっと言い返す。

「知っているなら」

どうして。そう口が言葉を発する前に、彼女が僕の頭にタオルを乗せていた。僕の潤いを、乾いたタオルが吸っていく。僕の髪が、乾いてしまう。

「止めるよ」

とっさに手を振り払い、僕は雑踏に紛れ込もうとした。しかし、赤い魚が後をついてくる。

「一緒に行くわ」

しつとりと濡れた赤いドレスを身に纏った魚は、僕の静止も聞かずに付いてきた。泳ぐ速度を上げると、彼女の歩きが早くなる。振り払おうと路地に逃げ込むと、彼女も路地についてくる。

仕方なく僕は、赤い魚と共に泳ぐことにした。

足掻いている。

雲の嘆きは相当のもので、時折、稲光を交え嗚咽している。それでも全身がびしょ濡れになった僕達は泳ぐのを止めない。

「ねえ」

赤い魚が声を発する。

「何？」

僕は泳ぐ速度を緩め、彼女の声を聞いた。

「何で傘もささずに歩いてるの？」

泳いでいるんだよ。僕は魚だから、濡れていないと死んでしまうんだ。

そう伝えようと思ったが彼女には伝わらない気がして、止めた。

「あなたは？」

返事の変わりに質問する。何故僕の後について回るのか、見当も付かない。

「歩きたかったから。君と同じ」

少しハスキーな赤い魚の声は、姉のものと似ていた。

「ね？ 少し、休憩しよ？」

身勝手な魚は僕の服の袖を引き、丁度ふたりが並んで雨宿りできる場所へと連れ込もうとする。地響きのように激しい嗚咽が、嘆く雲から轟いた。

赤い魚は雨が吹き込まないように道路側に背を向け、手に持った鞆からフィルムに包まれた小さな箱を取り出した。包みを開き中から一本取り出すと、火を点ける。

煙草の煙を吐き出しながら、彼女は口を開いた。

「ねえ、どうして歩いているの？」

「泳いでるんだよ。僕は、魚だから」

説明するのも面倒なので、僕はそう吐いた。

「泳いでる？」

それほど驚いた様子もなく、彼女は続ける。

「私も、泳ごうかな」

激しい閃光。空を見上げると雲の嘆きは頂点に達したかのようで、隙間なく埋め尽くされた灰色の塊が、全てを多い尽くしていた。

彼女の吐き出す煙の色と良く似ている。

「疲れちゃった。人間やつてくの」

足元に落とした吸殻を踏み付け、赤い魚が空を見上げた。

「魚になりたいな、私も」

つられて、空の嘆きも激しさを増していく。

「簡単だよ」

姉の声に似た魚を見ながら、僕は号泣する空の涙に身を任せた。

*

アスファルトの地面に横になり、空と向き合う。ずぶ濡れの身体に、涙が降り注ぐ。心地良く激しい涙が、僕の全身を撃ち付ける。

「ほら、簡単」

僕は魚だから、雨がないと死んでしまう。

「本当、簡単ね」

赤い魚も、雨がないと死んでしまうのだろうか。

横に寝そべる彼女を見ながら、僕は自然と口を開いていた。

「姉が、結婚するんだ」

だから僕は魚になった。

「うん」

さして興味もない様子で、赤い魚は空を見据えている。

「本当は、おめでとうって言わないといけないんだけど」

言いたくない。姉が他人のものになることなど、耐えられない。

雲の嘆きより、僕の嘆きの方がずっと。

「めでたくないんだ」

僕の嘆きの方がずっと、深く、苦しく。

「めでたいなんて思えないんだよ」
救いがない。

彼女に、空に向かって宣言する。僕は姉のことが好きだった。ずっと、今でも。いつまでも。永久に。好きだった。

激しい涙が、魚になった僕の心を突き刺していく。激しく打つ雨粒が、僕を責め立てる。

一時の気の迷いだと、何度も言い聞かせてきた。けれども容赦なく、僕の心を奪い去る。姉が憎く、愛しかった。

降り注ぐ涙と流れ出した僕の涙が混ざり、アスファルトに解けていく。

「言わなくて良いんじゃない？」

赤い魚の一言が、僕の心を溶かしていく。

「言えないなら、無理に言わなくても」

僕の欲していた言葉を、姉と似た声で。

「私は、良いと思う」

姉を祝福しなくても良いと、赦してくれる。

「私は、言えなかったから」

激しい涙が、声を霞める。耳に届くはずの声を掻き消していく。

赤い魚の独白は、僕の耳に届かない。嘆き悲しむ雨の声だけが、僕には聞こえていた。

溺れている。

ゆっくりと上半身を起こし、赤い魚を見下ろす。彼女は、泣いているようだった。

嗚咽交じりに呻く声は小さく、僕の耳には届かない。時折聞こえてくる、ごめんなさい、という懺悔を乞う言葉だけが、彼女の心を映している。

雨音を避けるように彼女の口元に耳を寄せた。彼女の呻きを、聞き取るために。

「本当は、好きだったのよ」

聞こえてくる懺悔の情は。

「でも言えなかった」

もつと。

「言ったら、かりそめの友情すらもなくなってしまるのが怖くてもつと。口にしたかったのに出来なかった言葉たち。

嘆く赤い魚の悲しみは、僕のそれと似ているような気がした。僕

と赤い魚は、とても似ているような気がした。

僕と赤い魚と空の嘆きは、とても似ているような気がした。

*

路地裏の狭い道とはいえ、他の魚が通らないわけではない。僕たちを怪訝な顔で覗き込み、関わらないように逃げていく。

化粧の溶けた雨水がアスファルトに降り注ぐ。赤い魚は、嘆く雲と同じ色の雨を流していた。

「結婚式に行ったの」

赤い魚は嘆く。

「彼女は幸せそうな笑顔だった」

幸せの隣にいるのが自分ではないことを嘆く。

「だから私は、言わなきゃいけないかったの」

おめでとつを。心にもない言葉を。

けれども、言えなかった。それは、僕と同じで。愛しい人の幸せを憎むという、感情は同じで。

「嘘なんて言えない。言いたくない」

おめでとつなんて言いたくない。

だから僕は魚になった。だから彼女も魚になろうとしている。

空から降り注ぐ悲しみの雨で僕が魚に変貌したように。彼女も、魚になってしまったかったのだろう。

泳いでいく。

僕と赤い魚は良く似ている。

叶わぬ思いに胸を焦がし、嘆いている。

「言えないよね」

嘘なんて。

「言えないわよ」

嘘なんて。

僕たちは、空を見上げた。先程まで嘆き悲しんでいた雲が、隙間から光を覗かせている。

雨はまだ止んではいなかったが、雲の涙が枯れるのも近い気がした。

魚になれる時間も、終わりが近付いていた。

「止むかな」

雨が。

「止むかな」

涙が。

いつまでも魚になっていたかったのに、終了の時は迫っている。僕は魚になりたい。なり続けたい。

「相手の幸せを願わないなんて、最低よね？」

赤い魚が口を開く。

「仕方がないよ。僕には出来ない」

人間に戻りかけている僕が、肯定する。

「私にも、出来ない」

赤い魚はそう呟き、微笑んだ。僕もつられて微笑んでみせる。

「止んだら、お終い？」

上半身を起こし、赤い魚が空を見上げた。

「お終い、かな」

眩しく照りつける太陽を憎々しく思い、呟く。

「でも、水があれば魚になれるから」

雨でなくても。溺れるほどの水を流し、僕は魚になる。

「人間には戻りたくないな」

この思いが泡と化すなら、このままで。

「奇遇ね、私も」

憧れる心は、恋焦がれる心は、このままで。

赤い魚が立ち上がる。降り注ぐ涙はもう、僅か。

「人間、辞めちゃおっか？」

減りゆく傘の花を眺め、僕もゆっくり立ち上がる。僕の心の涙と違い、雲の涙は枯れ始めていた。

*

通り雨は残酷に、僕の海を奪っていく。周囲を泳ぐ魚たちが、人間へと姿を変えていく。

「辞めるって、どうやって？」

赤い魚に尋ねてみる。方法があるのなら、僕はそれに従いたい。

「泳ぎ続ければ、いつかは」

魚に、なれる。

「どうやって？」

海はもう枯れ始めている。人間に戻る時が近付いて来ている。魚で居続けられる時間は、もう。

「海は、枯れないわ」

化粧の溶け出した顔をタオルで拭い、彼女は続ける。

「枯れない。私の海は、涙を流し続けてる」

変色したタオルを鞆の奥にしまい込み、赤いドレスの女は続ける。

「お姉さんに、伝えて」

僕を見つめ、微笑みを浮かべ。

「あなたのことが好きでした」

ずっと、好きでした。これからも、ずっと好きです。愛していま

す。

「さようなら」

彼女はそう告げると、そのまま雑踏の中に消えてしまった。赤いドレスを着た魚は、自分の海へと帰っていった。

僕は、彼女の言葉を思い返す。

あなたのことが好きでした。

ずっと、好きでした。これからも、ずっと好きです。愛していません。

さようなら。

僕の伝えたかった言葉と彼女の言葉は同じで。

姉に伝えてしまうと、僕はもう、気持ちを泡に帰すことしか出来なくなってしまう。

彼女は僕を差し出して、ひとりで魚になろうとしている。僕を人間に戻して、ひとりで魚になろうとしている。

赤い魚を探すが、見付からない。赤い魚はひとりで海へと戻ってしまった。赤い魔女は、僕の全てを奪って消えた。

僕の家から水を奪い、赤い彼女は消えてしまった。姉の友人は消えてしまった。

僕は式場へと戻り、自分の喉下に言葉というナイフをあてる。人魚姫がそうしたように、僕も泡と化すしかない。

「姉さん」

突然消えた僕を探していた親族が、ずぶ濡れの僕に気付く。魚になつていたらと伝えても、彼らは理解しないだろう。

乾いたタオルを渡され、水分を奪われていく。魚でいられる時間は、あと僅か。

「伝言があるんだ」

僕からの。赤い魚からの。

「何？」

式は滞りなく終了しており、姉と、親族しか会場にはいない。友人がひとり消えていても、親族がひとり消えていても。回り始めた歯車は止まることを知らない。

泡と化す前に、僕は姉の姿を目に焼き付ける。この先消えてしまっても、いつかは思い出せるように。

あなたのが好きでした。

ずっと、好きでした。これからも、ずっと好きです。愛していません。

さようなら。

僕はそう告げ、人間へと戻る。

魚になり、姉を遠くから見つめることも出来ず。

僕は、泡になった。

泳いでいく。(後書き)

拙作に最後まで目を通して頂き、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2397g/>

センチメンタルマーメイド

2010年10月8日15時27分発行